
オーズ・トライアル

ジョーカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーズ・トラリアル

【Nコード】

N1923U

【作者名】

ジョーカー

【あらすじ】

水しかないと言っているこの世界。水平線に浮かぶ小さな都市、それを「水上都市」と呼んでいる。3年前この世界に起こった事、そして陸地が無くなった理由を追うべく今、この都市で一人、いや、二人の少年少女が波乱を巻き起こす！！
原作とは違う、オリジナルストーリー！

act1「黒き男」(前書き)

ネットでの投稿は初めてです。 気楽に見ていただけたらありがたいです!!

act 1「黒き男」

薄暗い部屋の中、白いスーツとシルクハットに身をつつんだ男は、とある赤い器械と黒い、Sの字が書かれたUSBメモリを手にして、何かあるわけでもないのにただ、歩いていた。 > i 2 5 9 8 9 — 3 3 8 1 <

「来たか」

その男にめがけて、顔を布で隠し、スーツを着た何者かが襲い掛かる、男はそれをかわすと、その赤い器械を腰に当てる。するとその器械はベルトになる。そしてメモリについたボタンを押した。

『スカル!!』

器械にメモリを入れる、すると器械から音が鳴り出した。

「変、身!!」

男は黒い風に包まれて、違う姿へと変貌する。黒い装甲に身を包まれ、顔はまるで髑髏、再びシルクハットをかぶった男はこういった。

「俺は：仮面ライダー スカル!!、お前の罪を数えろ!!」 > i 2

6 0 0 7 — 3 3 8 1 <

男は瞬く間に何者かを倒す、その時だった、もの凄い音と共に部屋は一瞬にして水に飲み込まれた。

本当に一瞬だった。

少年は空を見上げていた、一瞬も曇ることのないこの空を。

1年前に起こった大災害、突然南アメリカ大陸やユーラシア大陸が消え、水位が上がった。

残ったのは島国のみ、しかしそんな島国でも、ありとあらゆる山が消えたのだ。

大勢の人が死んだ、たった一つの宇宙の石ころのせいだ。

幸いにも水位は25メートルほどしか上がらず、デパートなどの屋上にいた人たち、もしくは逃げてきた人は助かった。

だが、大きすぎる50メートル以上のものは沈んだ、主に大企業のビルなどだろうか。

この水しかないに等しい水平線、人も一つの水上都市に約2000人程度しかない。

7階建てデパートの屋上や10階建ビルの途中に造られた屋外フロアを橋でつなぎ、なんとか生きていけるようになった場所の事を俺たちは『水上都市』と呼んでいる、少なくとも日本には70もないだろう。 > i 2 5 9 9 0 — 3 3 8 1 <

俺は再び歩き出した、朝の7時でどこも勤める会社なんて無いのにみんな働き者だ、船に乗って大人達は離れ小島へいく、あるゲームをしに行くらしい。

生きながらえる事ができるように…。

act 2「メダルと少年と幼馴染」（前書き）

どうも（*。、）ノ・タジャドル・ジョーカーです。

初めてのシリーズ投稿（というか投稿も初めて）なので、多々分かってにくい所がありましたら教えていただけると幸いです。

そして、この物語は仮面ライダーシリーズを基盤にした、オリジナルストーリーです。

act 2「メダルと少年と幼馴染」

ピピピピッ！ピピピピッ！

目覚まし時計の音で俺は目を覚ました。

部屋からでて、階段を降り、リビングに入る。

冷蔵庫から茶を取り出し、それを飲みながらテレビをつけた、テレビ朝日、8時だった。

『宇宙来た

！！』> i 3 2 1 9 6 — 3 3 8 1 <

「……………」

仮面ライダーか…、そう呟きつつも番組を変える。

至って何もやっていない、俺はテレビを消して、トーストを焼き始めた。

俺の名前は『坂本 さかもと 健 たける』、高校1年。

家は、沈没しかけた8階建てマンションということもあり、8階中5階までは水没、7階と8階は居住スペースだ。

1フロアに部屋は2つしかないが、7階8階の合計4部屋は1つに改装している。

6階は何かつて？、6階は部屋や外廊下の壁、フェンスの1部をを撤去して、水上バイクのメカニックススペースになっている。

このご時世、いろいろと生活していくには、島を渡る必要がある。その為、ほとんどの人が持っている訳だ。

海は穏やかだ、嵐や津波、雨さえ降らないこの地では珍しくも無いのだが。

今日は、確か1つ用事がある、『幼馴染の住んでいる旅館に行く』
といたってシンプルこの上無いのだが。

しかし、コレが俺の運命を変えるなんて思うハズもなかったのだが、
というか思いたくもない。

そうして俺は、バイクに乗り、外へ出た。

青いバイクが海を駆ける、ああ、なんて気持ちいいんだろう。

俺のバイクは、青を基調とした色で、名前の『シューティングスター F-319（通称、オーシャン・ブラスター）』とピッタリなデザインだ。 > i32195—3381<

歌でも歌っている間にもう到着してしまった。

『旅館 夢見荘』

ここは、海に建つ12階建てのビルを、和風に改装したものだ。元の敷地が大きいので、ビルも広い。

2荘もあれば充分である。

俺は、バイクを専用のステーションに留めると、中に入った。

「すいませーん」

そこへ、着物を着た若い女性が現れる。

「あつ、ようこそ御越しいただきました、夢見荘へ… って健ちゃん！？」

健ちゃんって…、健^{たけ}なんだけど…、ってまあいいか、昔からこうだし。

そう、この女性こそ、俺の幼馴染、『南^{みなみ} 奏^{かなで}』だ、黒い短めの髪に、赤い着物が良く似合う、いろいろとイメージは各読者の皆様に任せたいと思う。

「若女将もいろいろと、大変みたいだな」

「うん、でももうなれちゃったよ」

そう、奏は若女将なのだ、家の都合らしい。

そんなことはさて置き、自分の部屋に着くと、俺は荷物をおろし、首に下げているカメラで外の景色を撮った。

『ブルーバードフライ』、文字通り青い外觀の2眼レフカメラだ、『ブラックバードフライ』というのが元機種で、特別にオーダーメイドで造ってもらった物である。 > i32194—3381<

「お昼には、仕事に空気が出来るから」

「ああ」

そうして奏は仕事に戻っていった。

内心、会えて少し、嬉しい気持ちもある。

奏が若女将になってからは、学校でも会えないのもそうだが…。

act 2「メダルと少年と幼馴染」（後書き）

この物語はフィクションであり、実在する人物、団体、事件、その他の固有名詞や現象などとは関係ありません。ウソっぱちです。どつか似てたとしても、それは他人の空似です。

最後に、画像提供ありがとうございましたm（――）m

act3「オーズ」(前書き)

どうも(*。.)ノ・タジャドル・ジョーカーです。

この物語は仮面ライダーシリーズを基盤にした、オリジナルストーリーです。

act 3「オーズ」

「部屋にいても暇だな…」

だいたい、旅先の旅館で思うことだろう。

約束の、昼まではまだ時間がある、時計の針はまだ10時半を指していた。

特に行くあてもないので、ロビーに行こうと思う。

そうしてロビーに着くと、俺は異様な光景を見た。

「オイ、ネーチャン、俺たちと一緒に遊びにいかない？」

女性の係員が、3人組の男にナンパされているようだ。

ため息をつきながらも、俺は声をかけた。

「やめてやれよ、可哀想だろ…。というか、こんな所でして恥ずかしいのか？」

「ああ？、何だテメー、やんのか？」

そう言いながら、俺の胸ぐらをつかんだ。

ヒソヒソ、ヒソヒソ…

しかし、男も周りの状況に気づいたのか、手を離す。

「チツ…」

そうして男は去っていった。

「あの…、ありがとね」

「ああ、どういたしまして…って、どっかで会った事あるような…」

頭を180度回転させ、ようやく答えにたどり着く。

「里沙か？」

「え…？…、あつ、健ー！」

こいつは「四羽 里沙^{はつ}」、中学時代の同級生だ。

「あんた、なんでこんな所へ？」

「ちよつと旅行に來ただけだよ、暇だから。」

（来ても暇だが、）

「フーン、奏に会いに来たんだ。ラブラブだもんね、2人」

「からかうのは止める、つか、からかう事しか興味無いだろ？」

そう、こいつはいつも、からかってくる、というか今まで真面目に話したことなんて1回も無いくらいだ。

「でも、もう付き合わない方が良くもよ」

「どういう事だよ」

里沙は少し小声で話し出す。

「さっきの3人組、あれってウチが雇ってるカメラマンなんだけどね、変なポスター作ったり、ナンパしてくるわで大変なのよ」

「変なポスター？」

「これよ」

そう言つて里沙は、壁に貼つてある1枚のポスターに、指を指した。
「……………」

一体、どんなポスターかは、読者である、皆様のお考えに任せるとしよう。

そうして、元の話からずれている事に気づいく。

「そういや、奏がどうとかつて…」

「ああ、そうだった」

里沙は、周りに誰も居ない事を確認すると、話を続けた。

「あの3人組のリーダー格と付き合ってるのよ、奏が」

「あつはハハハハハハ！！」

「声でかい！！」

「あいつに限つてある訳ないだろ」

「私見たのよ、2人が付き合っているのを…」

不意に沈黙は訪れた。

「オイオイ、冗談よせ里沙」

「私がそんな嘘つくと思う？」

思わない。

こいつは毎回と言っていいほど嘘をつくが、それもフェアなのばかり。

こんな嘘は絶対につかない。

「わかった…、小耳にだけ挟んどく」
そう言つてここを離れることにした。

午後12時半、とある部屋の前。

まだ来ない、一体どうしたものか、とつくに30分もオーバーして
いる。

奏は時間を守るしつかり者なのだが…。

しばし、コーラでも飲んで待つことにする。

側にある自販機でコーラを買い、飲む。

ゴクゴクゴク…

ふと、後ろを見ると、そこには3人組のリーダーと奏がなにやら話
す姿が見えた。

慌てて自販機の影に隠れる健。

「今月分の金は振り込んだいたぜ…」

（金？、金銭絡みか？）

「しかし奏ちゃんもアレだよねえ、自分の元彼裏切ちゃってサア」

その時、俺の中で一際高い鼓動が鳴った。

それはいつか感じたのと同じ鼓動。

復讐にとらわれ、思いのままに暴走した時の鼓動だった。

男の方が、俺が見てるのを知っていたとばかりに挑発的な顔を見せ
る。

（やばい、気づかれた！）

俺は急いで、走って逃げた。

「一体なんだったんだ、あれは…」

ふと、深呼吸をすると、ある事が脳裏に過ぎった。

（私見たのよ、2人が付き合っているのを…）

「あるハズ…無いよな…？」

時すでに夕方、綺麗な夕焼けが見える。

風呂にでも入ろうかと温泉に向かっていた。

温泉はロビーから左の、外通路を使って行く、ちょっとした公園が有るくらい広い。

その頃、120号室

「オイ木柄枝きがらし、あの男の事なんだけどよ…」

カメラマン3人組の密談だった。

「邪魔だ、潰してこい」

木柄枝と呼ばれた、緑の革ジャンの男は、リーダーの命令に頷く。

「へい」

また、その頃健。

健は、公園のベンチから海を眺めていた。

「おやっさん…」

健には、1人だけ慕っていた人がいた。

『鳴海なるみ 壮吉そうきち』

健の恩師に当たる人だ。

しかし、3年前、2024年に起きた大水没で死亡したと公表されたのだ。

死因は水死。

これには、不審な点がある。

彼は探偵だった、その時の依頼現場は、水や核も届かないシエルタ
ーの様な場所。

水死するハズがない上、肝心な死体すら無いのだ。

死体が無いのにどうやって水死と言いつけるのか、その裏には、誰
かが知られたくない何かを隠すためしたのではないかと思ったりも

する。

健は今でも生きていると信じている。

（生きてるよな…、おやつさん）

その時だった、

う、うわァー！

突然、公園にいる人たちが悲鳴をあげる。

周りをよく見ると、緑色をした、虫の怪人がこちらを睨んでいる。

「見つけたぞ、坂本 健…！」

「お…俺かよ！」

ビュイン！

怪人のムチの様な物が健に飛んでくる。

「うわぁァー！！」

ムチは後ろの、石で出来たオブジェに当たった。

どうやら間一髪、よける事ができたようだ。

砕け散ったオブジェを見ると、そこには3枚の、メダルの様なものがあつた。

「なんだ…コレ」

赤、黄、緑、と、色鮮やかである。

そこへ、青い機械が放り投げられる。

そしてどこからか聞き覚えのある声。

「それを腰に当てて！」

「こ…こうか？」

健は機械を腰に当てる、すると、機械はベルトに変わる。

「そしたら、右から、タカ、トラ、バッタの順番でメダルを入れて
！」

「タカ？、ああ赤のメダルか…、トラ、バッタ…よし！」

「後はスキャン！」

「スキャン！？」

健は、ベルト横の黒い機械に気づくと、ベルトのバックルを傾けて、その黒い機械に『オースキヤナー』で、メダルを3枚スキャンした。

『タカ！、トラ！、バッタ！、タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！』
こうして、お馴染みのコンボメロディと共に、健はオーズ（タトバ
コンボ）へと変身した。

> i 2 6 0 6 7 — 3 3 8 1 <

act3「オーズ」（後書き）

この物語はフィクションであり、実在する人物、団体、事件、その他の固有名詞や現象などとは関係ありません。ウソっぱちです。どこか似てたとしても、それは他人の空似です。

act 4「暴走」(前書き)

どうも(*。*)ノ・タジャドル・ジョーカーです。

この物語は仮面ライダーシリーズを基盤にした、オリジナルストーリーです。

act 4「暴走」

「こ…こうか？」

健は機械を腰に当てる、すると、機械はベルトに変わる。

「そしたら、右から、タカ、トラ、バツタの順番でメダルを入れて！」

「タカ？、ああ赤のメダルか…、トラ、バツタ…よし！」

「後はスキャン！」

「スキャン！？」

健は、ベルト横の黒い機械に気づくと、ベルトのバックルを傾けて、その黒い機械に『オースキャナー』で、メダルを3枚スキャンした。
『タカ！、トラ！、バツタ！、タ・ト・バ、タトバ、タ・ト・バ！』
こうして、お馴染みのコンボメロディと共に、健はオーズ（タトバコンボ）へと変身した。

> i 2 6 0 6 7 — 3 3 8 1 <

ガアア！

カマキリの風貌の怪物は、備えてある鎌で切りかかってくる。
ハア！

こちらも腕にある『トラ・クロー』を展開し、鎌の攻撃を防ぐ。

カキーン！

そしてまた、カキーンと相手の攻撃を次々と防いでいく。

「今度はこっちの番だ！」

ジャキーン！

健はオーズのトラ・クローが怪人にヒットする。

「クッ…、完全復活していない事が、こんなデメリットを生むとは…」

「完全…復活…！？」

「少し喋り過ぎたか…、キサマはコイツと遊んでろ！」

そう言うと、怪人は自分の額に、銀色のメダルを入れた。

怪人から、また新たな怪人が現れる。
象とカマキリが合わさった様な怪物だ。

どんな怪人かは、読者のご想像に任せるとしよう。

最初に現れた怪人は、いつの間にかいなくなっていた。

「ウオオオ！」

ジャキイーン！

トラ・クローとキックでの連続攻撃を仕掛ける。

そして、たちまちヒットしていく。

「グウ…」

「もう一度スキャンして！」

「よし！」

健「オーズは言われた通りにもう一度スキャンした。

「よし！、後もう一息だ！」

その時だ、さっきの正体不明の声がまた聞こえる。

『スキヤニングチャージ！』という電子音と共に体中にパワーがみなぎる。

オーズは高く跳ぶと、空中に出現した、赤、黄、緑のリングをくぐり、怪人にキックを放つ。

「セイヤアアア！」

「グオオオ！」

怪人は断末魔をあげると、爆発し、チリとなった。

チリの中には、黒っぽいメダルが2枚あった。

健はそれを拾う。

「これも…メダル…？」

act 4「暴走」(後書き)

この物語はフィクションであり、実在する人物、団体、事件、その他の固有名詞や現象などとは関係ありません。ウソっぱちです。どこか似てたとしても、それは他人の空似です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1923u/>

オース・トライアル

2011年10月20日21時06分発行